

第6表 処理別粒重及び発芽歩合

区別	項目	50粒重	同乾物重	乾物歩合	発芽歩合	散布時莢色
5月31日5g散布	6月6日抜取	4.35 g	3.15 g	73 %	76 %	緑色
	5月31日10g "	4.15	3.05	74	82	
無処理	"	5.25	4.10	78	80	
6月6日5g散布	6月11日抜取	5.70	4.31	76	94	30%黄色
	6月6日10g "	5.10	4.00	78	94	
無処理	"	5.55	4.25	77	100	
完熟後抜取	(対照)	5.85	4.74	81	100	

吸収による莢内発芽、呼吸作用に伴う活力の消耗、また病菌の寄生、抵抗性の弱化によるものと考えられる。

それで、完熟後は直ちに採種すべきであるが、主枝分枝によつて莢の熟期は一樣でないで過熟のものも生ずるため、これをさけるには莢の大部分が黄熟した

時収穫し乾燥するのが安全である。黄熟種子なら発芽は完熟と変らない。この際、茎葉が繁茂し乾燥が困難なことがあるので、立毛中に乾燥剤の使用が便利であり、乾燥剤の使用も成熟前1週間以内なら発芽に支障はない。

苧麻新品種「しらぎぬ」、「あおかせ」について*

吉岡昌二郎・児玉 三郎・野村 个・松永 弥七
高木 文男・宮越 秀一・穂村 豊・河辺 愛宏
大河内秀樹・岩沢 正美・鴛海 文彦
(九州農業試験場)

1. は し が き

苧麻の新品種「しらぎぬ」、「あおかせ」は1958年3月、品種登録され各県に配布し、普及されるに至つたので、育成経過及び特性を述べて参考に供する。生産力検定試験に御協力を得た愛媛県農試、鹿児島県農試鹿屋分場、宮崎県農試都城分場各位に厚く感謝の意

を表する。

2. 来 歴

1937年宮崎県立農事試験場川南分場の農林省指定苧麻試験地において嘉義正種の自然交雑種子を採種し、1938年より選抜を行い1957年に本検定を終了した。選抜経過は次表の通りである。

第1表 選 抜 経 過

項 目	選抜段階	個 体 選 抜	系 統 選 抜	生産力検定予備	生産力検定試験
選 抜 年 次 (年)		1938~1940	1941~1943	1948~1952	1954~1957
選 抜 年 数 (年)		3	3	5	4
選 抜 個 体 (数)		2,000→139	139→4	4→2	2
選 抜 率 (%)		7.0	2.9	50.0	

1952年生産力検定予備試験において4系統中より多収な2系統を選抜して、川南1号、川南2号と仮称し

* 昭和34年5月9日 第21回例会で発表

た。更に1954年より川南試験地及び九州農試作物第二部(熊本県菊池郡西合志村黒石原)、愛媛県農試、鹿児島県農試鹿屋分場、宮崎県農試都城分場に於て地方

第 2 表 特 性 概 要 (川南)

品 種	項 目													
	萌芽色	頂芽色	托葉色	葉 色	葉柄色	雌花色	雄花色	葉 形	分 枝	耐風性	開花期	繊維の 色 沢		
し ら ぎ ぬ	紅 褐	淡 褐 緑	淡 紅 緑	黄 緑	淡 紅 緑	紅	黄 緑	心 臟 形	無	稍 弱	晩	淡 白 褐		
あ お か ぜ	紅 褐	淡 褐 緑	淡 褐 緑	黄 緑	淡 紅 緑	紅	黄 緑	心 臟 形	無	稍 弱	極 晩	淡 白 褐		
細 茎 青 心 種	淡 黄 緑	淡 緑	淡 緑	黄 緑	淡 緑	淡 緑	黄 緑	心 臟 形	無	弱	晩	淡 黄 褐		

適否試験を行いその優秀性を確認し、1958年に品種登録を行つて、苧麻農林1号「しらぎぬ」、苧麻農林2号「あおかせ」と命名した。

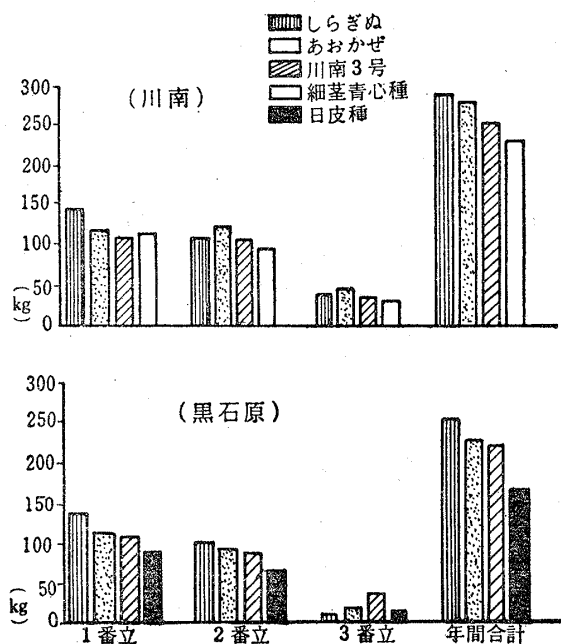
3. 特 性 調 査

しらぎぬ、あおかせは細茎青心種と大体類似した特性をもっているが、附帯色は一般にしらぎぬ、あおかせが紅褐色を帯びている。又耐風性も細茎青心種より稍々強い。しらぎぬは萌芽数は少ないが、草丈が特に高く、茎径が太い。あおかせは細茎青心種と類似した草状であるが茎数多く歩留の高いのが特色である。

4. 收 量 調 査

生産力検定試験は前記5カ所で行つたが、沿海平地地の川南及び中山間の寒冷地黒石原における結果のみを示した。尚、川南3号は1935年細茎青心種の自然交雑実生より育成し、「しらぎぬ」「あおかせ」と同様の選抜経過を経た品種であるが、品種登録にもれた優良品種なので併せて記した。細茎青心種及び白皮種はいずれも同地帯の代表品種である。

第 1 図 定植3年目番立別繊維重



第 3 表 生 産 力 検 定 試 験

その 1 川 南 (1954~1956)

項 目	草 丈 (cm)		茎 数 (3.3 m ² 当本)		葉 付 生 茎 重 (10 a 当 kg)		繊 維 重 (10 a 当 kg)			歩 留 (%)		繊 維 重 比 率 (%)			
	年次, 番立	1955 1番立	1956 1番立	1955 1, 2番立	1956 1, 2, 3番立	1955 1, 2, 3番立	1956 1, 2, 3番立	1955 1, 2, 3番立	1956 1, 2, 3番立	合計	1955 1, 2番立平均	1956 1, 2, 3番立平均	1955 1, 2, 3番立	1956 1, 2, 3番立	合計
し ら ぎ ぬ	201	242	163	293	6581	8235	172	297	469	3.2	3.6	113	126	119	
あ お か ぜ	170	205	235	390	5944	6968	168	287	455	3.9	4.1	107	122	116	
川 南 3 号	180	216	196	259	5663	6713	164	255	419	3.5	3.8	104	108	107	
細 茎 青 心 種	177	225	218	346	5381	6375	157	235	392	3.7	3.7	100	100	100	

その 2 黒 石 原 (1956~1958)

項 目	草 丈 (cm)			茎 数 (3.3 m ² 当本)		葉 付 生 茎 重 (10 a 当 kg)			繊 維 重 (10 a 当 kg)			歩 留 (%)		繊 維 重 比 率 (%)		
	年次, 番立	1956 1番立	1957 1番立	1958 1番立	1956 1, 2, 3番立	1957 1, 2, 3番立	1958 1, 2, 3番立	1956 1, 2, 3番立	1957 1, 2, 3番立	1958 1, 2, 3番立	合計	1957 1, 2, 3番立平均	1958 1, 2, 3番立平均	1957 1, 2, 3番立	1958 1, 2, 3番立	合計
し ら ぎ ぬ	98	195	222	113	197	1673	5799	6170	215	242	457	3.6	3.9	137	153	145
あ お か ぜ	100	153	184	148	298	1613	4635	5168	180	217	397	3.9	4.2	115	137	126
川 南 3 号	102	183	201	175	229	2150	5646	5190	212	214	426	3.7	4.1	135	136	135
白 皮 種	93	157	190	119	189	1549	4587	4567	157	158	315	3.4	3.5	100	100	100

「しらぎぬ」に川南、黒石原ともに最も多収であり、茎数は少いが草丈が高く、両地帯に適する品種である。「あおかせ」は川南では第2位、黒石原では第3位であるが、既存品種よりすぐれている。草丈は低いが茎数が多く、繊維歩留は最も高い。山間地においては「しらぎぬ」川南3号より劣る。つぎに番立別の収量を第1図に示した。

「しらぎぬ」は1番立収量が他品種より特にすぐれているが、このことは2番立及び3番立が往々にして耐風害をうけることを考えれば極めて重要なことである。3番立収量は川南3号がすぐれ、低温時においてもよく生育することを示している。挿木繁殖によらず一般の吸枝繁殖方法をとる場合に増殖の速度は吸枝量によつて左右される。「しらぎぬ」の吸枝発生量は他

品種より少く3分の1程度である。したがつて普及が遅れる欠点がある。

5. 摘 要

苧麻新品種「しらぎぬ」「あおかせ」はいずれも嘉義正種の自然交雑実生より育成した品種であるが、概要は次の通りである。

「しらぎぬ」は晩生品種に属し、草丈高く、茎数少く繊維歩留は高く、繊維細胞は細茎青心種より細く優美である。収量は最も多収で特に1番立収量の多いのが特色である。九州南部の温暖地帯及び中山間地帯に最適の品種である。

「あおかせ」は極晩生品種で茎数の多いのが特色である。繊維歩留は最も高く、繊維の品質は良好で比較的温暖地帯に適する優良品種である。

苧麻の選抜方法に関する研究*

第2報 系統選抜について

児玉 三郎・野村 介・吉岡昌二郎

(九州農業試験場)

1. は し が き

本会報第13号に於て「個体選抜について」述べたように、早期に選抜する方法の研究を進めているが、個体選抜の次の段階である系統の選抜方法について結論を得たので報告する。従来行なわれていた系統選抜の方法について概要を述べると、個体選抜で選抜された個体は株を掘り上げて12~15cmに切つた吸枝を各個体3.3m²当り24本宛反復なしで植付けて系統選抜試験を開始する。系統選抜試験を3~5年で終了し、選抜された系統は再び掘り上げて反復数を3回とし、系統選抜と同様に植付けて生検予備試験を行う。生検予備試験を3~5年で終り生産力本検定に移る。本報告では主として系統選抜試験と生検予備試験に於ける選抜方法について述べる。なお、苧麻は栄養繁殖によつて栽培されるので品種育成の場合、米麦の如く世代をくりかえして固定する必要はなく、雑種第1代の個体がそのまま系統となつている。

2. 材 料 及 び 方 法

(1) 供試材料

供試材料は1955年植付けた系統選抜試験、162系統

* 昭和34年5月9日 第21回例会で発表

中欠株のない117系統及び1957年植付けた生検予備試験22系統を用いた。耕種法は吸枝耕種法に準じた。

(2) 調査方法

調査は番立別の収穫期の草丈、茎数、茎径、生茎重、繊維重、繊維歩留及び生育途中の草丈、茎数、茎径を苧麻調査基準に準じて調査したが生育初期の茎数は30cm以上、中期以後は70cm以上を調査した。なお、生茎重、繊維重は従来、3.3m²全刈調査を行っていたが、周縁効果をみるために、中央部1.2m×1.2m及び周縁にわけて調査した。

(3) 試験経過の概要

系統選抜試験は初年目は台風の為生育はみだれたが2~3年目はほぼ順調に生育した。台風は来襲したがほとんど刈取直前であつた為収穫調査には支障がなかった。

生検予備試験の植付初年目1番立は順調に生育し、8月上旬に収穫したが2番立の生育中期に台風を受け、熟期に達していなかつたが、直に刈取り其の後に生育したものは3番立として11月に特に刈取調査を行った。然し各番立とも草丈短く繊維重の調査は行なわなかつた。又初年目の越冬期に霜害を受け、地下部が